平成２５年度

講座「丹波学」

戦国の世と丹波

～戦乱を駆け抜けた武将たち～

（公財）兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑

目　次

１　講座「丹波学」の開講にあたって　・・・　１

２　講座内容　・・・　２

【８月３１日】

Ⅰ　開講記念講演　春日戦国太鼓～組曲「丹波の赤鬼」～　・・・　３

Ⅱ　丹波の街道から戦国の世を偲ぶ　・・・　４

【９月２８日】

Ⅲ　中世後期の丹波について～戦国期「丹波三強」の形成～　・・・１０

【１１月９日】

Ⅳ　光秀と信長～本能寺までの道程～　・・・１６

【１２月７日】

Ⅴ　戦国丹波の城と武将たち　・・・２２

【２月１６日】

Ⅵ　戦国時代の長寿メシ　・・・２７

３　講師紹介　・・・３０

４　編集後記　・・・３１

１　講座「丹波学」の開講にあたって

１　丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から５０～７０ｋｍの近郊にありながら、森林面積が約７５％を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特の文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」に丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

２　講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を主題として平成８年に開設しました。

今年で１８回目を迎える本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

３　平成２５年度のテーマ

今回のテーマは、「戦国の世と丹波～戦乱を駆け抜けた武将たち～」です。

室町時代中期、「応仁の乱」（1467）が勃発。丹波は京の後背地をしめていたこと、幕府の実力者である細川京兆家が守護職を世襲していたことなどから、丹波国人衆は否応なく京の争乱に翻弄されざるをえませんでした。応仁の乱の終熄後も、戦乱は日本中に波及し、世の中は戦国時代へと突入していった。それは丹波も例外ではなく、丹波一円はさらなる動乱へと巻き込まれていきました。

今回は、こうした時代背景をもつ丹波地域の歴史に残る武将たちの生き方やその時代の文化に焦点を当て講座を組み立てました。戦国時代史研究の第一人者である小和田哲男氏をはじめ、戦国武将の歴史研究家として著名な講師を招き、最新の研究や情報などを織り交ぜながら、学習を展開していきました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私はこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1　丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
2　丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
3　丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
4　丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

２　講座内容

■ テーマ　　戦国の世と丹波～戦乱を駆け抜けた武将たち～
■ 期　間　　平成２５年８月３１日（土）～平成２６年２月１６日（土）
■ 場　所　　丹波の森公苑　多目的ルーム
■ 日　程

開催日	学習テーマ	講 師 等
平成２５年 ８月３１日 （土）	開講記念講演 　春日戦国太鼓～組曲「丹波の赤鬼」～	春日戦国太鼓保存会
	丹波の街道から戦国の世を偲ぶ	園田学園女子大学非常勤講師 　久下　隆史　氏
９月２８日 （土）	中世後期の丹波について 　～戦国期「丹波三強」の形成～	大山崎町歴史資料館館長 　福島　克彦　氏
１１月９日 （土）	光秀と信長～本能寺までの道程～	歴史作家・武蔵野大学政治経済研究所客員研究員 　桐野　作人　氏
１２月７日 （土）	戦国丹波の城と武将たち	静岡大学名誉教授・文学博士 　小和田　哲男　氏
平成２６年 ２月１６日 （日）	戦国時代の長寿メシ	食文化史研究家 綜合長寿食研究所所長 　永山　久夫　氏

Ⅰ　開演記念講演
『春日戦国太鼓
～組曲「丹波の赤鬼～」～』
春日戦国太鼓保存会

＜春日戦国太鼓＞

昭和 63 年、戦国太鼓を創作し、春日町の伝統芸能にしたいとの気運が高まり、町民の協力により結成。

以来 25 年間、地元での出演はもとより、東京ドーム、神戸まつり、ニースのカーニバルに 2 回参加するなど、精力的に演奏活動を展開している。

また、小学校や中学校にも出向き、若い世代に引き継ぐ活動も行っている。

＜組曲「丹波の赤鬼」＞

時に天正 3 年の春、戦国の動乱の最中。天下統一をねらう織田信長は、その将明智光秀に命じて丹波を攻略させた。

水色桔梗の旗をなびかせて、ひたひたと押し寄せる明智の大軍と、これを迎えうつ黒井城主赤井悪右衛門直正率いる丹波国人衆との間には、いくたびか熾烈な戦いがくり返された。

第一章　初陣の章

明智の大軍大挙来襲を知った黒井城では、勇壮な呼び込み太鼓が打ち鳴らされ、いよいよ戦いの幕が切って落とされる。

続いて、城門を開いて一騎、二騎、三騎と小旗をはためかせた騎馬武者が、敵陣めがけて切り進んでいく。これにつづいて、鉦、太鼓の音ともに、城兵が一挙にどっとくり出し、押したり、引いたりの激戦が続く。

やがて、赤井勢が明智の大軍をうち破り、高らかに勝利の雄叫びをあげる。

第二章　祝宴の章

初戦に打ち勝った黒井城では、赤々とかがり火が燃やされ、勝利を祝う宴が、にぎやかにくり広げられる。

盃がめぐり、手拍子、足拍子がなり、踊りの輪が次々に広がる。やがて、城下の領民たちもこの輪に加わり、勝利の宴は果てしなく続く。

この時の踊りが、現在の伝統芸能「黒井おどり」の原型と伝えられ、そのリズムや囃子がこの中に取り入れられている。

第三章　決戦の章

明智光秀の軍勢が再び来攻し、いよいよ黒井城の命運をかけた決戦のときがきた。

矢弾丸が飛び交い、馬がいななき、刀や槍の穂先が光り、両軍死力を尽くしての戦いが続く。と、どうしたことか、突然赤井の軍勢は一斉に軍を引き、黒井城に引き上げた。

気を抜かれた明智の軍兵も、戦いをやめ、戦場はしばらく静けさがただよう。その時、後ろの隠れていた赤井勢が、明智軍の最後から猛然とおそいかかった。

不意をつかれて驚いた明智軍は、なだれを打って黒井城下から敗走していく。これが世に名高い「赤井の呼び込み戦法」で、この決戦の様子を再現する。

Ⅱ　丹波の街道から戦国の世を偲ぶ

園田学園女子大学
非常勤講師　久下　隆史

はじめに

今日のテーマ、「丹波の街道から戦国の世を偲ぶ」というのは、大変難しい。以前、篠山市の街道を歩いたが、道標や名号碑などの石造物で、戦国時代以前のものはない。今回の話の対象となる八上城付近も歩いたが、山城の遺構を除けば、戦国の世を偲ぶものはなかった。

今回の講演では、京都の吉田神社の神官であった吉田兼実の日記『兼見卿記』を使用し、彼の目を通じて戦国末期の丹波の様子を見てゆきたい。また、『兼見卿記』もふれている、八上城の攻防戦と兵糧を運んだ道などを考えてゆきたい。

１　『兼見卿記』と丹波国

光秀の丹波攻めは、天正３年（1575）６月 17 日から始まる。10 月には信長に与していた赤井氏を救援するため、但馬に兵を進めた。もともと丹波の武将の多くは、信長に臣従していたが、氷上郡黒井城の荻野氏や多紀郡八上城の波多野氏は、中国地方の毛利氏や大坂の石山本願寺に同調して反信長陣営に所属するようになっていた。

反信長軍に属した荻野氏の居城を取り囲んだ明智軍の中には、多紀郡の波多野氏もいた。ところが、天正４年（1576）正月 15 日、突如、波多野氏の裏切りで黒井包囲網が崩れ、光秀は京都へ敗走する。兼見は「旧冬以来惟任(明智光秀)日向守取詰在陣也、波々野(波多野秀治)令別心、惟日(光秀)在陣令敗軍云々」と書いている。

このときの光秀の敗走コースは、よく分かっていないが、波多野氏の居城のある八上城下を通る、現在の国道 372 号線（京街道）を通ったとは考えにくい。おそらく、近世の多紀郡の地誌類に出ている春日の野瀬谷から鼓峠を通り、中世の山陰道である国道９号線を利用して京都に帰ったと考えられる。

この光秀の敗走後も、信長は、光秀に丹波攻めの主将を務めるよう命じ、光秀は丹波の武将による黒井城包囲網を崩していない。この敗走時に、兼見は京都の白川で光秀と会っているので、この時丹波の様子を聞いたと思う。

２月 18 日、光秀は、再び丹波に兵を進めた。翌、天正５年（1577）10 月 29 日、光秀と細川藤孝(幽斎)は丹波の諸城を攻め、この日、波多野方の籾井城(篠山市福住)を落とした。波多野の裏切りに対し、波多野方の城を落としながら八上城を攻略していったようである。

天正６年(1578)３月 14 日、黒井城の荻野直正が病死したことも兼見は記している。『兼見卿記』には書かれていないが、『信長公記』には、この年の 12 月 11 日に八上城の周囲を光秀の手兵で取り巻き、堀を造り、塀や柵を設け、塀際には諸卒の小屋を設けていたことを載せている。堀や塀・柵などは現状で確認できないが、八上城を取り囲む攻撃用の付城は般若寺城、大上西の山城など、遺構がよく残っている。このあと、光秀は摂津の三田に付城を４ケ所設け、12 月 21 日には多紀郡に入っている(御霊神社文書)。

般若寺城跡

翌、天正７年(1579)３月 16 日、光秀は多紀郡に兵を進め、陣に入る。本陣の場所は書かれていないが、篠山川を挟んだ対岸の般若寺城であつたと考えられている。その上で、丹波は部下の与次に任せて自らは京都に帰り、石山本願寺、伊丹城や播磨に兵を進めている。

悪右衛門といわれた、強豪荻野直正の病死は光秀にとって丹波攻略の大きな弾みとなった。兼見は、喜助に命じて丹波の光秀に手縄と腹帯を届けている。

５月 18 日には、兼見の日記には「丹州波多野在城今度惟向取詰、近々可令落着云々」とある。八上包囲網が功を奏し、この時期には落城の目途がたったのであろう。

それから１ケ月もたたない、６月１日には、「丹州高城落城、四百余人討死云々」とある。八上城が落城、波多野方の兵、四百人以上が討ち死にした。城主の波多野兄弟は捕えられて、亀山(現亀岡)に移送されていた。「数月取詰、盡兵糧如此」とあるから、兵糧が底をついて落城したのである。

この時期の様子を、『信長公記』（天正７年６月）には、次のようにある。

> 去程に、丹波国波多野の館、去年より惟任日向守押詰め取巻き、三里四方に堀をほらせ、塀・柵を丈夫に幾重も申付け、責められ候。籠城の者既に餓死に及び、初めは草木の葉を食とし、後には牛馬を食し、了簡尽果、無体に罷出候を悉く切捨て、波多野兄弟三人の者調略を以て召捕り、六月四日安土へ進上。則、慈恩寺町末に三人の者張付に懸けさせられ、さすがに思切って、前後神妙の由候。

般若寺方面から見た八上城跡

光秀は、三里四方を囲み、兵糧攻めにした。籠城の者は、餓死したり、草木や牛馬を食べたりしたが、逃げてきた者は切り捨てた。これが、兼見卿記に書かれている四百人の実態と思われる。波多野３兄弟(秀治、秀尚、秀香)を調略によって召し捕り、京都を引きまわした上、安土へ送った。信長は、安土の慈恩寺町の外れで磔にした。６月６日のことである。兼見は、「諸人見物、無念の仕合也」と書いている。

波多野を撃った光秀は、黒井城への攻略を進める。この頃、信長は細川藤孝に、馬が走りやすいように氷上郡への通路２･３本を造らせている(細川家文書)。２・３本の通路とは、鐘ケ坂、瓶割峠、佐中峠のことであろうか。また、光秀は多紀郡と氷上郡の堺に金山城を築き始める。

兼見は、天正７年(1579)10 月 11 日、丹波の光秀を見舞うため京都を出発している。この時に、京都から氷上郡の柏原まで利用したのが、古代の山陰道、後の京街道であった。「為惟日(光秀)見舞丹州罷下、今夜本免(本梅)一宿、於加伊原(柏原)新城普云々、

明日下着之由申了」とあるので、現在の亀岡市東本梅町付近で一泊、翌 12 日に柏原に着く計画であった。京都から老の坂を経て亀山に入り、今の国道 372 号線付近を歩き街道沿いの東本梅で泊まったものであろう。「加伊原新城普請」という、柏原の新城普請は、今の柏原八幡神社の裏か金山城だと考えられる。

金山城跡

翌、10 月 12 日の昼過ぎに柏原に着いた兼見は、光秀が下山して来た際、「路次面会」し、小袖を渡している。そのあと、城中に同道して夕食のもてなしを受け、夜は「佐竹羽州(佐竹出羽守)小屋二一宿」している。「下山之砌」などという表現をしていることから、兼見が宿泊した新城は金山城であった可能性がある。

兼見は、光秀の慰留を断り翌 13 日の朝早くに京都に向けて出発した。光秀はお土産に鮭 5 匹を手渡した。帰路も本梅で宿泊し、14 日の末明にたって昼過ぎに京都に着いている。

このように、兼見は旧山陰道を利用して京都と氷上郡を往来している。中世の山陰道は、国道 9 号線が使用されたというが、古代山陰道も利用されていたのである。

その後、光秀は天正 7 年(1579)8 月 9 日に荻野直照の守る黒井城を落とし、波多野や荻野に与した者を撃ち、10 月 24 日に丹波の平定を信長に報告している。

2　八上城の攻略と兵糧を運んだ道

(1)明智の高城山攻略の方法

すでにのべたが、光秀は八上城を落とすために、周囲に堀、塀、柵を設け、光秀方の武将で城の回りを取り囲んだ。『信長公記』天正 6 年(1578)12 月 11 日には、「塀際に諸卒町屋作に小屋を懸けさせ、其上、廻番を丈夫に、警護を申付け、誠に獣の通ひもなく在陣候なり」とある。蟻の入る隙間もないという攻囲網を敷いたのである。

その結果、八上城では多くの餓死者を出すことになる。また、天正 7 年 4 月 4 日付の明智光秀書状(下条文書)には、餓死者が四・五百人に及び降伏してきた者の顔は青く腫れていたと書かれている。また、同年 5 月 6 日付の小畠助大夫らに宛てた書状には、籠城中の兵を攻撃しないこと、落ち武者に対する対応、落城後の処置など波多野方への対応策も細かく書かれている。八上城の攻撃は、周到な計画のもとで行われたのである。

八上城は兵糧攻で落城するが、この城へ兵糧を運んだという資料が近世の地誌類にある。

(2)兵糧の確保の史料

元禄 14 年(1701)の『摂陽群談』には、三田市下青野にあった青林寺の項に「丹波国多紀郡高城之城主帰依の寺也、天正年中明智日向守、高城を責の時、当寺より山林に密通して、兵糧を送る。勝利なく落城、明智内通を知て、当院に放火する」とある。同様の記事が『摂津名所図会』にもある。青林寺は、山中に近世の墓石が残るだけで、谷の入り口にある石仏だけが中世の面影を残している。

天正年間から 100 年以上過ぎた江戸中期の地誌であるため、本当に兵糧を運んだかどうか判断しかねるが、青林寺から母子に出、国境の天王峠の頂上から右手に尾根道

を利用して八上城まで運ぶのは可能である。

また、寛政6年(1716)の『篠山封彊志』の四十九院跡の項に、「曽地村の山谷に在り、法道建つ、天正中寺僧真如坊潜かに糧を八上に輸し、事発れ明智大いに怒り逆に寺を焚き、僧を殺す、爾後寺絶ゆ」とある。同様の記事が、篠山藩の地誌『篠山領地志』『丹波志』にもある。この寺は、弥十郎ケ岳山麓にある廃寺で、植林中に石垣や石造物が今も見られる。この寺から兵糧を八上城に送るとなると、明智方の包囲網を潜らなければならない。この点は、検討の余地がありそうだ。

少し変わった史料に、大阪城天守閣が所蔵する天正7年(1579)2月晦日付の波多野秀治判物がある。この文書は、秀治から兵庫屋惣兵衛に出されたもので、徳政・徳役、領内の関銭免除などの特権を惣兵衛に与えている。この時期は、籠城の時期に当たる。こうした御用商人が、諸物資を城内に供給したものと思われる。

籠城時の波多野方の史料は残っていないが、近世の地誌類から推定すれば、波多野氏は寺院勢力を取り込み、遠隔地からの兵糧道を確保していたのかも知れない。その裏には、反信長勢力である大坂の石山本願寺などとの連携があったとも考えられる。

3　摂津・丹波の交通路と城館

（1）脚木摺峠（すねこすりとうげ）

最後に、摂津から丹波に抜ける諸道と道を守る城郭について見ておきたい。摂津から丹波に至る峠道については、『摂津名所図会』巻九に出ている。まず、池田から能勢を経て多紀郡に入る天王峠は、脚木摺峠という名で出てくる。

> 天王村の後山なり。丹州籾井村に出づる。大坂天満橋より此嶺まで十一里二十七町四反。此所摂丹の界なり。一里が間牛馬通ぜず。特に阪路屈曲にして、石荒く木根高くして、往來之者足の踏途を患ふ。これにより脚木摺といふ。

天王村は今の能勢町天王、籾井村は今の篠山市福住のことである。峠が急峻で、歩いて越えればすねをこするというところから名付けられた峠名である。この道は、丹波から池田へ米が運ばれ、冬には杜氏一行が通った道でもある。峠の頂上の天王側には、昭和37年(1962)4月27日に南繁吉が建立した「丹波街道古民謡碑」がある。

碑文には「丹波大坂七廻　身過ぎなりやこそ一夜おき　越すは丹波のお蔵米　九里に九つ　峠を越えて　いこか池田の大和屋へ」という唄が記されている。

籾井城跡

福住は、天引峠からと脚木摺峠からの二方向の道が合流し、そのために押さえの城郭も多い。その中核的な城郭は、籾井氏の居城であった籾井城である。この籾井城に接するように安口城と安口西砦がある。さらに、摂津からの峠道を押さえるように仁木城もあった。福住は東西南北の街道が交差する要衝であったため、安口西砦を入れれば4ヶ所の城で守りを固めたのである。しかし、多紀郡の東の入り口に当たる福住は、光秀にとっても重要な場所であり、いち早く天正5年(1577)10月に落としている。

（２）天王越（てんのうごえ）と青原峠

三田から多紀郡に出る峠は天王越と青原峠、日出坂嶺が出ている。ここでは、天王越と隣接する青原峠をまず取り上げたい。『摂津名所図会』巻九には、天王越と青原峠は次のように記されている。

①天王越

母子村の後にあり。これも丹波小枕村へ出づる。大坂高麗橋より此峠まで十二里二十町。其行路は高麗橋より十三渡へ一里、十三渡より神埼へ一里、神埼より小濱へ三里三町、小濱より生瀬へ三里十一町、生瀬より三田へ三里十六町、三田より母子へ四里、母子より天王峠まで六町なり。

②青原峠（現蓑峠）

母子村にあり。永澤寺の山號こゝに據れり。これより丹波小枕の西に出づる。

四季山城跡

実際歩いてみると、天王越の方がかなり歩きやすい。この道が通常使われていたことが歩けばよく分かる。青原峠は標高差が大きいため、天王越に比べると歩くのには厳しい道であった。現在の天王越は利用する人がなく一部植林部分が荒れているが、青原峠と比較すると今でも歩きやすい。

どちらの道を利用しても、多紀郡側に出ると目の前にあるのが四季山という独立した小山である。この四季山に四季山城があり、その西に谷山城がある。その他、天王越から来る敵に対して小多田の小谷城が押さえの役割を果たしていたのかも知れない。四季山と谷山城は摂津側と古市方面からの備えの城として機能していたようである。

（３）日出坂嶺（ひでさかとうげ）

最後に、摂津から丹波に入る東側の道として、伊丹、灘に杜氏一行が利用した近世の大坂街道がある。その街道の丹波と摂津を結ぶのが日出坂嶺である。日出坂嶺は、峠というよりは標高 248 メートルの坂という程度である。『摂津名所図会』巻九には、次のように記されている。

日出坂の村の上方にあり。丹波油井村へ出づる。大坂天満橋より此所まで十三里十五町六反、堺大小路より十六里二十五町一反、又此嶺より丹波笹山へ一里半

日出坂嶺を押さえる城郭は、油井城と油井西城であるが、西城は油井城を攻める明智方の付城の可能性がある。いずれにせよ、油井城は摂津方面からの最初の押さえであった。

油井からは、播磨からの道との合流点に、波賀野城と栗栖野城がある。

油井城跡

こうした京都、摂津方面からの押さえの城を整理すると次のようになる。

（4）峠道と城館

丹波の城館名は『丹波志』の呼称を記した。○は『丹波志』に記載の無いものを示す。

①脚木摺峠と城館

（丹波の城館は『丹波志』の呼称を記す。）

【摂津側】

○吉良居館（大阪府豊能郡能勢町天王、吉良氏）

【丹波側】

西野々旧宅（西野々往還大道の南一町許鳥部山半麓、西村源三郎居城）

安口古城（村の西北山の山上白井右近居城）

同所古城（安口西砦、右近涼所）

福住古城（福住駅家の北山上、籾井下野晴重）

②天王越・青原峠と城館

【丹波側】

谷山古堡（村の東南上、平林太膳）

○小谷城（小多田西山上、天王越の城）

○四季山城（小枕四季山）

③日出坂嶺と城館

【摂津側】

○藍岡山城（藍本中央部、藍氏居城）

○曲り城（藍本曲り、堀相模守居城）

【丹波側】

油井古城（油井村東山上、酒井佐渡守）

○油井西城（油井城西山上、城主不明）

おわりに

吉田兼見の日記の記事から、明智光秀がどのように丹波を攻めたのかをまず見た。兼見の日記には、本能寺の変後の丹波は何も書かれていない。そこで、八上城攻防戦を巡る状況と兵糧を運んだという寺院と道を考えてみた。高城山に兵糧を運んだと考えられる道の中でも、摂津からの道は石山本願寺との関係を含めて今後の調査がまたれる。特に、天王越から八上城へ向かう尾根道は、光秀方の付城をかわす道があったのか興味深い。最後に、国堺の押さえの城を見た。

ここから言えることは、近世初頭の戦国の道は現在の国道と大きく異ならないことである。道の広さや場所には異なりがあるが、本質的な変化は少ない。そういえば、兼見が訪ねた柏原への道も、古代の山陰道をもとにした、現在の 372 号線に近い道を歩いている。道は人々の利便性の中で変化するが、重要な道は変わらないということであろう。

Ⅲ　中世後期の丹波について
～戦国期「丹波三強」の形成～

大山崎町歴史資料館
館長　福島　克彦

はじめに

最初に、本稿でいう「丹波三強」とは、戦国期に勢力を振るった荻野氏(赤井氏)、内藤氏、波多野氏のことである。戦国期丹波では、一般的に知られた戦国大名は形成されなかった。しかし、大体郡単位において、大きく三つの勢力が戦国後期に形成された。もっとも「丹波三強」という表現自体は、あくまでも現代的評価であるが、永禄 8 年(1565)8 月に内藤宗勝(松永長頼)が戦死した際、氷上郡赤井氏、多紀郡の波多野氏、船井郡内藤氏の鼎立状態になると言われている(今谷明氏)。それでは、こうした三強はどのように形成されていったのだろうか。そして、他の丹波の国衆とは、どのような関係を持つのだろうか。以下、14 世紀まで遡りつつ、戦国期の国衆たちの動向を見ていきたい。

1　南北朝内乱と荻野朝忠

（1）鎌倉幕府の滅亡と丹波国衆

14 世紀前半に後醍醐天皇による鎌倉幕府討幕運動が進展すると、鎌倉側の足利尊氏が篠八幡宮において反旗を翻し、後醍醐方へ味方した。その際、丹波の長沢、須智、山内、蘆田、余田、酒井、波賀野、小山、波々伯部氏が足利尊氏方へ服属した(『太平記』)。しかし、同じ丹波の足立、荻野、小島、和田、位田(綾部市)、本庄(氷上郡)、平庄氏などは「今更人ノ下風ニ立つべきニ非ズ」と若狭、北陸道から京都へ入っている。足利方に味方したながらも、別個に行動して入洛しており、荻野氏らが独立した態度をとっている。

（2）内乱期室町幕府と丹波国衆

鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇による親政が実施されたが、この「建武の新政」は失敗した。不満に感じていた武家たちは尊氏を応援したため、尊氏が後醍醐方に反旗を翻した。尊氏は、北朝方を擁立して、京都に室町幕府を開いた。さらに一門らを守護に登用して、地域支配を実施させた。この時、丹波国では仁木頼章が守護を担当している。しかし、南朝方の国衆も点在し、南北朝の内乱は続いた。以下は、尊氏についた久下時重の軍忠状である。

【史料１】

久下弥五郎重基申す、今年(建武 4 年)十月九日、和久城御発向之時御供仕り、大手攻口に於いて箭倉を構え、昼夜軍忠を致す之刻、同十七日後攻に御敵寄来たり之間、身命を惜しまず、散々太刀打に及び、疵[右足ノコウヲ被切]をせられ畢んぬ、其子細荻野彦六郎検知せしむる上者、後証として御判をたまうべき候、此旨を以って御披露あるべし候、恐惶謹言、

建武四年十月　日　松(私)重基(裏花押)
進上す　御奉行所
(証判)　　(仁木頼章)
「承り了んぬ　(花押)」
(押紙)
「仁木伊賀守」

軍忠状とは、戦いに参加した武士たちが、恩賞に与るため、自らの活躍を記した内容

を大将へ上申する文書である。丹波久下荘の久下重基は尊氏方に服属し、和久城（福知山市）を攻撃していた。「大手攻口」に櫓を構え、昼夜に関係なく軍忠を働いてきたが、敵の後詰にあい、身命を惜しまず、太刀で戦った。この時右足の甲を切る疵を受けた。こうした詳細については荻野彦六郎（朝忠）が検知したことを確認しており、守護の御判を受けて、将軍に披露してほしいとする。文書の奥に丹波守護仁木頼章が承知した旨を記し、花押が据えられている。

この史料１の軍忠状で、将軍足利尊氏－守護仁木頼章－丹波守護代荻野朝忠－国衆久下重基という主従関係が追うことができよう。

（３）内乱の長期化

さて、丹波氷上郡、天田郡では、守護代荻野朝忠が活躍していた。しかし、将軍に対して「恨み奉ることあり」とあるように、反旗を翻した。以下、康永 2 年（1343）の『祇園執行日記』の記述である。

【史料２】

丹波国守護職のと、荻野彦六（朝忠）穏（陰）謀を企てるの間、仁木殿上表し、仍って山名豆州（時氏）捕われる云々、仍って打ち手となし、近日下向せられるべき云々（略）波々伯部保、軍勢等狼藉いたすべからずの由、制札（以下不明）

荻野朝忠が陰謀を企てたため、守護仁木頼章が幕府へ辞表を提出した。新しい守護になった山名時氏が高山寺城（丹波市氷上町）を攻撃し、朝忠は降伏している。再び北朝軍として活躍している。これで確認できることは、主従関係とは別に、守護代荻野朝忠が勢力を保持し、守護仁木氏に辞表を提出させるよう追い込んでいる。しかし、朝忠による荘園押領はその後も続き、室町幕府による荘園保護とは、しっかりと背を向けていた。

２　室町幕府の安定と丹波国

（１）細川京兆家による丹波守護職

明徳 2 年（1391）に 3 代将軍足利義満による南北朝合一した。足利将軍は室町幕府－守護体制が維持され、京都権門の荘園経営を保護していた。この合一直前に勃発した明徳の乱によって、守護大名山名氏が敗北すると、丹波における山名氏勢力は後退した。丹波守護は義満と近い細川頼元が補任された。頼元系統の細川氏惣領家は「京兆家」と言われ、代々丹波守護職を世襲していった。彼らは丹波の権門寺社領を保護し、幕府御料所も守られていた。また、禅宗寺院の荘園も保護されたほか、八木龍興寺など、禅宗寺院を建立されている。

史料 3～5 は、何鹿郡の安国寺領にかかる幕府の文書を示している。

【史料３】

丹波国安国寺領同国夜久郷内今西村事、申状・具書此の如し、荻野出羽入道拝領と号し、半済押妨云々、如何様事哉、もし子細申すあらば、追って糾明あるべし、早く其の妨げを止め、一円寺家雑掌沙汰付せられるべくの由、仰せ下さるる所也、仍って執達件の如し

応永八年五月廿六日

沙弥（花押）（畠山基国）

細川右京大夫殿

【史料４】

丹波国安国寺領同夜久郷内今西村事、今年五月廿六日御教書此の如し、早く仰せ下さるる之旨に任せ、荻野出羽入道の押妨を退け、一円寺家之雑掌に沙汰付せらるるべく之状、件の如し、

応永八年六月廿一日　右京大夫（花押）

細川遠江前司殿

【史料５】
丹波国安国寺領同国夜久郷之内今西村事、廿一日御遵行之旨に任せ、寺家に沙汰付せられ、執り進らせるべく請取之状、仍って執達件の如し、

応永八年六月廿三日　　遠江守（花押）
西倉二郎左衛門尉殿

幕府が荻野氏による安国寺の荘園押領を取り締まる内容であるが、幕府－守護－守護代－小守護代という上位下達で指令が伝わっている様子がわかる。これらは一括して『安国寺文書』として残されていた。こうした状況下、細川氏は幕府－守護体制を強化し、近親者や内衆で、こうした役回りを固めた。守護代も細川氏一族のほか、小笠原氏、香西氏、内藤氏らが担当していた。当初は、守護代は出入りが激しい交代となったが 15 世紀中葉から内藤氏が世襲することになった。当時細川京兆家の当主は幕政に関わっており、在京していた。内藤氏も在京していた可能性が高いが、具体的な業務に当たっていたことは間違いない。15 世紀前半は丹波国にとって、比較的政治的安定に恵まれた時期であった。

（２）丹波国内の動向

一方旧守護家だった仁木氏は伊賀守護となったが傍流は丹波に所領を持ち、幕府近習衆として将軍を支えていた。また、史料 1 にも登場した久下氏は将軍側近の軍事力となった奉公衆を担っていた。さらに中澤氏（長澤氏）は幕府奉行人として出仕していた。しかし、14 世紀に勢力を振るった荻野氏は荘園押領の主体としては名があがるけれども、政局から姿を消してしまった。

（３）応仁・文明の乱と丹波国衆

15 世紀中葉より、各地の守護では一族間の抗争が広がった。また、嘉吉の乱後に、山名氏と赤松氏の対立も惹起し、次第に畿内近国の政局も不安定になっていった。こうした混乱は応仁元年（1467）の応仁・文明の乱へとつながっていく。細川勝元を主将とする東軍と、山名宗全を主将とする西軍が京都に集結し、戦闘が始まった。この戦いは、ともに援軍を守護分国から呼寄せるため、各々の任国と京都との交通路の確保が重要な鍵となった。そのため、京都における戦いが山城国へ、あるいは畿内近国へと拡大していった。

但馬を任国の拠点としていた山名宗全は、軍勢を京都へ向ける際、当然丹波国を通過する。その際、但馬・丹波の国境である夜久野周辺で二度も激しい戦いが繰り広げられた。この時、丹波勢を率いて山名氏と戦ったのが守護代内藤氏であった。応仁 2 年 9 月の戦いでは、蘆田、久下、長澤、荻野、本庄氏らが従軍していた。ここで重要なことは、第一に守護代として活躍していた内藤氏が丹波勢の将として統率する立場であったことである。第二に応仁・文明の乱期に入って再び荻野一族が政治の表舞台に現れた点である。第三に夜久氏など、丹波の名字を名乗る土豪たちが、従軍するようになった点である。政治的混乱が契機となっているが、戦国期に入って、こうした村単位の土豪たちが改めて登場してくることになった。

３　細川京兆家の分裂と丹波の抗争

（１）延徳の丹波国一揆と国衆の争い

細川勝元を継承した政元は守護代を重臣上原氏へと交代させた。しかし、この上原氏と丹波国衆の間で対立が深まり、延徳の丹波国一揆が勃発した。延徳元年（1489）には荻野氏、須智氏がそれぞれ位田城（綾部市）、須知城（京丹波町）において籠城し、細川氏に対して抵抗を始めた。これは政元による軍勢派遣によって鎮圧されたが、荻

野氏は再び衰退の憂き目にあう。

明応2年（1493）、政元はさらに専横となり、明応の政変で、10代将軍義材（義稙）の将軍位を剥奪し、義澄へ挿げ替えた。同じ三管領の畠山政長も自害せしめたため、さまざまな対立関係を惹起させていった。同8年には、北陸から義材が、紀伊・和泉から畠山尚順が京都の政元を南北から挟撃した。この時、反政元という立場で、丹波奥三郡では「凶徒蜂起」が起こり、仁木氏らが政元らに抵抗している。ただし、政元は、この難局をしのぎ、赤沢宗益、波々伯部、波多野氏らに比叡山で入洛をうかがっていた義材方を攻撃し、これを撃退した。

（2）波多野秀忠の台頭

この頃から次第に波多野氏が細川氏の下として軍事力を担うようになってきた。永正3～4年（1506～07）の丹後国一色氏攻撃の際は、荻野弥十郎らとともに、赤沢宗益の与力として従軍している。

ところが、同4年に政元が暗殺されると、細川京兆家は澄元系と高国系に分裂を始めた。同5年、澄元を破った高国は、政権を掌握し、丹波国衆を軍事力として採用していく。以後、丹波勢との関係が保持されていた頃は政権も安泰であったが、大永6年（1526）7月に高国が香西元盛を暗殺する事件が起こり、元盛の兄弟の波多野元清、柳本賢治が反旗を翻した。当時阿波国には澄元系の晴元が政権奪還の機会を狙っていた。彼らは足利義維、細川晴元、三好元長らで構成され、堺に拠点を構えていた。丹波勢と阿波勢の連携によって、高国は政権を維持できず、京都を離れた。こうした細川京兆家の対立は、丹波国内にも影響が及び、前述の荻野氏は晴元方、高国方と分裂した。一方、波多野氏は、一族の不和を抱えつつも次第に多紀郡に勢力を伸ばしていった。

この大永6年から享禄年間を経て天文5年に至る畿内・近国の政治史は、もっとも複雑である。堺に上陸した阿波勢もまた分裂を遂げ、一向一揆や法華一揆との蜜月や抗争も続き、さまざまな諸勢力が入り乱れて抗争を続けた。この間に、高国は殺害され、後に三好元長も戦死している。天文5年（1536）の天文法華の乱の鎮圧の時期に晴元の勝利が確定した。その際、波多野秀忠は、晴元を支え、その軍事力を担った。

【史料６】

舟井郡ゝ代職のこと、申し付け候、憲法の旨に任せて、政道を専らとし、諸役を勤仕せしめ、領地をまっとうせられるべきの状、件のごとし、

天文三年七月二日　　秀忠（花押）

与兵衛尉殿

これは、天文3年（1534）に波多野秀忠が一族の与兵衛尉秀親へ出した判物である。秀忠が直々に船井郡代を任命している。言うまでもなく、船井郡には八木城の内藤氏がおり、その利害と抵触したはずである。以後、内藤氏と波多野氏は、丹波全域の支配権をめぐって争うことになった。そして、天文7年、14年に細川氏綱方となった内藤国貞は、波多野氏との戦いに敗れた。

以後、波多野秀忠は事実上の「守護」として認識されていく。「丹波守護波多野」（『大館常興日記』天文 9.3.23）、「細川京兆被官［丹波守護］波多野備前守」（『言継卿記』天文 13.6.23）などと記されている史料が見える。

（3）三好長慶による介入

三好長慶は元長の嫡男である。晴元の重臣として活躍していたが、次第に高国系の氏綱と結ぶようになった。天文18年（1549）江口の戦いで晴元方を撃破し、京都を占領した。すると形勢は細川氏綱・三好長慶・

松永久秀・内藤国貞と晴元と波多野元秀との対峙となった。天文 22 年（1553）丹波攻略を進めた松永軍は、波多野氏らの攻撃にあい、内藤国　貞は戦死した。その際、久秀の弟長頼が内藤氏の居城八木城に入り、後に内藤氏家督を継承した。

【史料７】

内藤跡目のこと、備前国貞、松永甚介と契約といえども、長頼分別をもって息千勝相続の上は、先々の如く、内藤と相談し、忠節肝要候、なお三好筑前守に申さるべく候、謹言、

三月二十日　　氏綱（花押）

桐村豊前守　殿

これは細川氏綱が丹波天田郡の桐村豊前守に出した書状である。「内藤跡目」、すなわち国貞の後継者について、契約の通り、松永久秀の弟長頼が継承しようとしたが、長頼は「分別をもって」自らの子息千勝に家督を相続させた。内藤氏相続については、このように決定したので、今後も内藤氏と相談し、忠節肝要を説いている。後に長頼は内藤宗勝と名乗り、永禄 5 年（1562）には正式に家督を継承した。

宗勝は、背後に畿内・近国をほぼ席巻した三好長慶の勢力をバックにしたため、丹波国内の掃討戦も優位に展開した。波多野氏のうち、秀親らは宗勝に味方し、当主元秀を八上城から追い出した模様である。さらに荻野氏、赤井手氏の拠点、氷上郡の黒井城も占領したと考えられる。

（３）荻野氏と赤井氏の連携

さて、明確な時期は不明だが、ほぼ同時期に、氷上郡の荻野氏にも大きな変化が生じつつあった。永正年間から登場した新興勢力の赤井氏が、次第に強力となり、荻野氏を包摂するようになった。以下は、赤井時家の子息才丸が荻野氏当主を継承する際に、時家が荻野一族に出した書状である。

【史料８】赤井時家書状『荻野文書』

わざわざ啓せしめ候、仍って才丸のこと、其の方へこれをまいらせ置き候へ由、伊与（伊予）守殿より承り候間、其の方御同名中へ使者をもって尋ね申すところ、もっとも然るべし思し召しの由の御返事候間、其の方へ参り置き候、然るところただいま御違変あるべきよし風聞候、雑説たるべき候へとも、もし事実においては、力に及ばず候条、涯分申し分けるべく候、しからば其の方御同名中御覚悟のとおり、具に示したまい、其覚悟をならせられるべく候、しかし最前の筋目、相違なくご入魂本望たるべく候、恐々謹言

（赤井）

八月五日　　時家（花押）

荻野出雲守殿

荻野筑後守殿

荻野対馬守殿

この史料 8 は、赤井時家子息の才丸（後の荻野直正）が荻野家を継承することが決定されている。荻野氏同名中に伝えつつも「御違変あるべきよし風聞候、雑説たるべき候」というように不平や不満も見られたため、「其覚悟をならせられるべく」と凄んでみせている。才丸継承には、クレームがついたものの、この家督相続によって、以後荻野氏は赤井氏連携するようになり、氷上郡の一大勢力となった。荻野直正は父時家、あるいは時家の跡を継いだ忠家と連署状を発給している。

（４）内藤宗勝ｖｓ荻野直正

前述したように、内藤宗勝は、波多野氏を傘下におさめた後、赤井時家を三木（兵庫県）に追い、黒井城も占拠したようである。しかし、永禄 5 年頃から宗勝の旗色が

悪くなり、八上城から一時追われた波多野元秀が多紀郡に入った。さらに荻野直正らも氷上郡黒井を奪回したようである。以後、宗勝は厳しい戦いを強いられたらしく、永禄 8 年（1565）8 月には荻野直正と戦いで 260 名が討死する惨敗を喫し、彼自身も敗死した。この戦いの場所は明確ではないが、氷上郡、天田郡、何鹿郡のいずれかであろう。

この宗勝戦死によって、丹波は、波多野氏、須智氏らが一円赤井方側に転じた。八上城にいた松永孫六も追放され、丹波における三好・松永勢力は撤退を余儀なくされた。この段階で丹波国は内藤氏、波多野氏、荻野＝赤井氏という三強が出揃ったことになった。

４　明智光秀の丹波攻略

以下、光秀の丹波攻略は簡潔に記すに留めたい。

天正 3 年（1575）6 月頃、織田信長の命令により、光秀による丹波攻略が開始された。彼は内藤氏を攻めた後、12 月頃から荻野氏の黒井城を攻撃した。この時、丹波国衆の大半が光秀に味方したと報じられていた（『吉川文書』）。しかし、翌 4 年正月に波多野秀治が裏切り、以後光秀の丹波攻めは失敗した。以後、光秀の攻撃対象は八上城攻めとなり、黒井城の荻野直正らとは一時赦免したようである。

光秀は、天正 5～6 年に再び丹波攻略を始めた。その後、同 7 年 6 月には波多野秀治の八上城を 9 ヶ月の兵糧攻めで屈服させている。さらに黒井城も同年 8 月に陥れ、光秀による丹波攻略はほぼ完了した。

おわりに

以上「丹波三強」が出揃う段階までの政治過程を追及してきた。まず、14 世紀に荻野朝忠が現れ、守護大名を恐れないしぶとさを見せた。15 世紀前半に入ると細川京兆家が丹波国守護職を担当し。荻野氏など、地元勢力は影を潜めた。ただし、当時は幕府による荘園の保護が奏功し、政治的安定期を迎えていた。この頃から細川氏内衆として活躍していた内藤氏が丹波守護代を担当し、世襲を進めている。

16 世紀前半に入ると、波多野氏が急速に勢力を伸ばし、内藤氏と守護代職をめぐって張り合うことになった。特に波多野秀忠は内藤国貞を追い出し、丹波全域に権限を振るった。

しかし 16 世紀中葉になると、三好・松永勢力の後押しを得た内藤宗勝（松永長頼）が丹波国を席巻した。しかし、これも長続きせず、永禄 8 年には敗死することになった。以後、内藤、波多野、荻野氏の三強が天正元年には出揃ったことになる。

現在、戦国期丹波の史料は充分活用されているとは言い難い。さらに、年次比定や新規の史料が発見によって、政治史解釈が変化する可能性がある。また、光秀の丹波攻略のように一次、二次史料が区別なく語られている場合も多々見られる。今後は、一次史料を厳密に使用することで、戦国史を復元していく必要があるだろう。

Ⅳ　光秀と信長
～本能寺までの道程～

歴史作家
武蔵野大学政治経済研究所
客員研究員　桐野　作人

はじめに―光秀・信長、最後の２年間―

光秀と信長を語る上で、本能寺の変を抜きにしては語れない。今まで20年程研究をしてきたが、今の段階で言えることをお話ししたい。

明智光秀はおそらく美濃出身で、牢人の身から越前朝倉氏に仕えた。その後、足利義昭が信長に支援を求めた。その過程で、何らかの形で光秀が信長と義昭の間に入って働いたのではないか。そうでないと、外様の光秀が坂本城主で郡持大名にまで急激に出世した理由がわからない。その後、光秀は信長の重臣となり、光秀の妹が信長に仕えるなど、光秀と信長は非常に親近関係であったであろうと考えられる。

元亀2年(1571)には坂本を中心とする近江志賀郡の一職支配、天正8年(1580)には丹波国主となった(ほかに上山城の支配も)。かつて高柳光寿氏が光秀の地位について「近畿管領」と呼んだのは言い得て妙かもしれない。

また同年、大坂本願寺が降伏した直後、信長の古参老臣佐久間信盛が信長から追放されたが、その折檻状に「丹波国日向守働き、天下の面白をほどこし候」と書かれ、信長が光秀を高く評価していたことは有名である。

その光秀がなぜ主君弑逆という謀叛に走ってしまったのだろうか。いろいろな考え方があるだろうが、私は光秀と信長の最後の２年間の出来事に、その背景や理由があるのではないかと考えている。

そこで、今回、その最後の2年間に2人の間に起きた主な出来事を検討しながら、2人の関係が破断へと至る要因に迫れたらと思います。また、本能寺の変直前と思われる光秀書状についても検討を加え、政変直前の光秀の心境を垣間見たい。

１　天正9年(1581)1月　洛中馬揃え、信長、光秀を嘉賞し、惣奉行に任命

京都を中心に、東の坂本城、南の上山城、西の丹波亀山城、北の丹後とほぼ京都を包囲する形で光秀の勢力圏はあった。

信長の家来が7、800騎、京都の町中を長さ1ｋｍぐらいの馬場を作って、パレードをした。それを、正親町天皇や公家たちが桟敷席で見物したと云われている。馬揃えは、一大イベントで、信長もその盛大なさまは六十余州に知られることになると言っているが、この馬揃えを取り仕切ったのが光秀である。信長の光秀に対する信頼の厚さだと思われる。

【史料「板原家文書」(『資料館紀要』16号京都府立総合資料館1988年)】

織田信長安土馬揃触状写

爆竹ニ諸道具こしらへ、殊きらひやかに相調、思よらすの音信細々の心懸神妙候、然者、重而京にてハ　切々馬を乗可遊候……六十余州へ可相聞之条、馬数多したて……

これは、信長が光秀にあてた朱印状であり、日付が天正9年正月23日。「安土馬揃触状写」とタイトルに書いてあるが、内容は京都馬揃への支度を調えるよう命じるもの

で、「京都馬揃触状」とした方がいい。実際に京都洛中で馬揃えが行われたのは、2月29月と3月6日の2回である。

「爆竹ニ諸道具こしらへ」は、安土での左義長のことである。信長はこの年の正月に安土城下で馬揃えを行っている。「殊きらひやかに相調」とあるように、安土の馬揃えも光秀が立派な演出をしている。さらに光秀が信長に丁重な贈り物をしたことに対し、信長は「思いもよらない立派な贈り物をしてくれた。細かい心がけが神妙である。次は京都でも頼む」と誉めている。後半には、京都馬揃えへの参加者を列挙してあり、光秀に彼ら全体の奉行を命じている。

安土馬揃えには太政大臣の近衛前久も参加していて、帰京後、公家衆に話したところ、正親町天皇も興味を示し、京都でも馬揃えを行うことになったと思われる。また、前年の年末に天皇妃で誠仁親王の生母（万里小路房子）が亡くなっており、喪が明けたころに馬揃えが行われた。信長が天皇や親王を元気づけようという意味も込めて行われたとも考えられる。

爆竹は、現在のどんど焼きで竹を燃やすことと同様である。ただ、京都馬揃えでは、喪明けということもあり、あまり派手な音を立てないで、馬のパレードだけを行った。

「六十余州へ…」は天下に轟くような馬揃えを行うので、できるだけ馬をたくさん集めるよう光秀に命じている。光秀は馬揃えの総奉行であった。

２　天正9年6月2日、「明智光秀家中軍法」（新修亀岡市史）、光秀、信長の御恩に感謝

「明智光秀家中軍法」は、本能寺の変のちょうど一年前に定められた。光秀が、家来達に対して軍役を具体的に記したものである。

その中の「軍役人数百石ニ六人多少可准之事」とは、百石あたり6人を出しなさいという軍役である。百石あたり3人というのが標準的な軍役であるので、相当重い軍役である。一万石だと600人、10万石だと6000人になる。

戦国大名の武田氏や北条氏などは軍役をしっかりと文書で定めていた。しかし、信長は大ざっぱに国郡単位での動員を配下の大名たちに指示したが、あまり具体的な数字を示さず、「なるべく大勢を連れてくるように」という漠然とした軍令であった。それは、大名たちの信長に対する忠誠心を競い合わせるためであったと考えられる。こういう手法は、信長のようなカリスマ性のある天下人にしかできない。そのため、織田家にはこのような人数を定めた軍役はなく、唯一見つかっているのはこの光秀の軍役だけである。このことから、光秀の領国支配は非常に緻密であったと考えられる。

他にも100石から150石の家来は、甲を被った武者が1人、馬1頭、指物1本、鑓1本を用意させるなど、石高毎に細かく記されている。これだけ具体的に決められると誰もサボタージュはできない。また、反対にこれだけの責任を果たせば自分の義務を果たしたということになるので、主従の関係が安定するということになる。

軍役を定めるには、前提の作業が必要である。それが検地である。個別の領主たち（給人）が持っている土地が何石なのか？光秀の時は自己申告制（指出）であり、秀吉のときの太閤検地は、測量（竿入）することが多かった。田畑の面積や等級から石高を決め、それにより軍役を定めた。この頃、畿内近国の信長領において一斉に検地が行われている。丹波の指出もその一環だったと思われる。そして指出完了後、光秀が緻密な軍役規定を定めたのだろう。

「瓦礫沈論之輩を召し出だされ、剰え莫太な御人数預け下さる」とは、瓦礫（石ころ）のように落ちぶれた光秀に、莫大で多

数を預けて下さった信長に対する感謝の気持ちが込められている。また、信長の期待にこたえるだけの働きをしないといけないという忠誠心も表れている。

このような家中軍法はほかの織田家中にはまったく見当たらない。そのためか、この史料は突出しすぎて不自然であり、本物なのだろうかと言われてきた。家中軍法は「御霊神社文書」「尊経閣文庫所蔵文書」の2種ある。その関係はよくわからないが、2種出てきたので本物だろうと言われるようになった（ほかに松浦文書「本能寺聞書」にも一部記されている）。

ただし、この家中軍法は体裁が不自然である。「定条々」「軍役規定」「末文」(a, b, c)は本来別文ではないのか。軍法18カ条という偶数箇条は奇数原則を逸脱しており、a.7カ条/b.11カ条とすべきではないか、ということも考えられ、家中軍法はまだまだ謎の部分がある。

３　光秀妹「御ツマキ」の死去、「信長一段ノキヨシ(気好)也」

【史料　多聞院日記】

今曉惟任被歸了、無殊儀、珍重々々、去七日・八日ノ比歟、惟任ノ妹ノ御ツマキ死了、信長一段ノキヨシ也　向州無比類力落也

多聞院は奈良興福寺の塔頭の一つで、多聞院日記は多聞院英俊という僧が3、40年書き綴った日記である。その中の天正9年8月21日条が注目される。去る（8月）7日、8日に光秀の妹の御ツマキが亡くなった。向州（日向守）とは光秀のこと。光秀の妹「御ツマキ」の死に「無比類力落也」。キヨシとは、漢字をあてるとおそらく「気好」だろうと思われる。キヨシとは、お気に入りという意味であり、「一段のキヨシ」は格別に気に入っていたということである。

この頃、女性は表に見えない内々の使者をつとめることがよくあった。

天正5年(1577)、近衛前久の帰参と興福寺一乗院門跡(前久長男尊勢の得度)にからむ近衛家家督問題につき、御ツマキは信長の内々の使者となり、尊勢側近に信長の意向伝えるなど、信長の女房衆のトップであったと考えられる。

御ツマキが亡くなったことは、光秀にとって信長との関係において大きな痛手であった。日頃、信長が何を考えているのか、何をしようとしているのかが光秀にはわからなくなったからである。これを機に光秀と信長の意思疎通を欠いたのかもしれない。

４　天正9年12月、「光秀家中法度」、織田家中の宿老・馬廻に気を遣う

【史料　光秀家中法度（山口県史資料編中世２　山口市歴史民俗資料館蔵文書)】

一 御宿老衆・御馬廻衆於途中挨拶之儀
一 坂本・丹波往復之輩、上者紫野より白河とをり、下者しる谷・大津越えたるへし…
一 洛中洛外遊興見物停止之事
一 於道路他家之衆与卒尓之口論太以曲事也

法度とは法律や掟のことである。これは光秀が自分の家臣たちに命じた掟書である。まず、家臣たちが信長の宿老衆・馬廻衆と遭遇した場合、道の片隅に寄り、慇懃に礼をするように。光秀は信長の重臣や側近衆にも気を遣っていた。

光秀の領国が坂本・亀山の2拠点のため、その中間にある洛中の往来をなるべく避け、北ルート（紫野～白河）または南ルート（しる谷～大津）を通るようにする。洛中を通過しないということである。

洛中を通るとトラブルが起こる可能性があるため、極力避ける、道路などで織田家中の他の家来達と軽率な口論をしてはいけない、ということも定められている。

5　天正10年(1582)1月、安土での正月参賀と光秀茶会

【史料　天王寺屋会記　宗及他会記】

惟任日向守殿御曾

床ニ上様之御自筆之御書、カケテ

信長と光秀の最後の正月となった天正10年。安土城での正月参賀で、光秀と松井友閑が信長に一番に挨拶をしている。光秀が織田家中のトップであった。

堺の豪商でもあり、信長の茶頭でもあった津田宗及・今井宗久・千宗易（後の千利休）のうち、津田宗及の屋号が天王寺屋である。茶湯日記では、自会記は自分が主宰する茶会、他会記は他人が主宰し、客として行く茶会。

1月7日に、光秀が主宰する茶会を開く（おそらく坂本城）。山上宗二・津田宗及が客。床の間に「上様之御自筆之御書」を掛けている。床の間は貴人座を示す。床の間に信長直筆の書を飾ったということは、そこに信長が存在すると擬人化しながら茶会を行ったということである。信長に対して並々ならぬ敬意を表していた。これが本能寺の変の5ヶ月の出来事だが、謀反を起こすとは考えられない。

6　天正10年5月7日、信長の「四国国分け令」

【史料　神戸信孝宛朱印状

（寺尾菊子氏所蔵文書）】

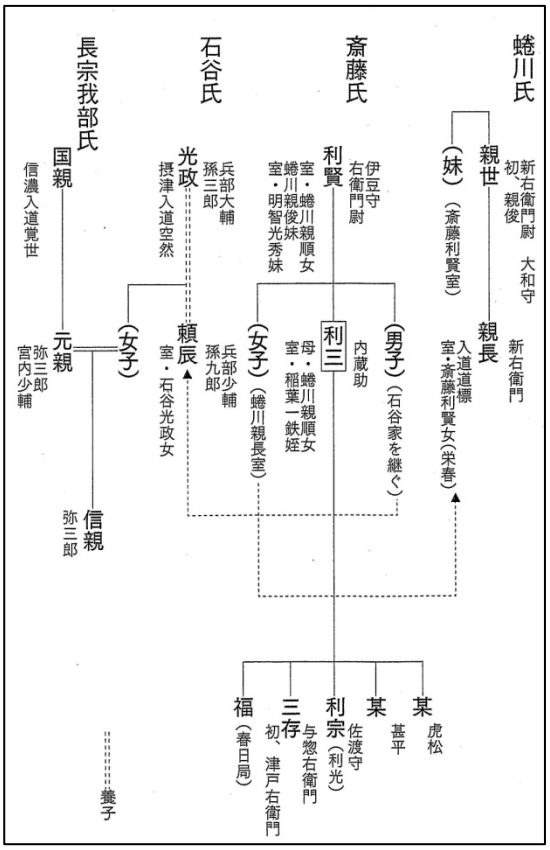
一、讃岐国之儀、一円其方可申付事

一、阿波国之儀、一円三好山城守可申付事、

一、其外両国之儀、信長至淡州出馬之刻、可申出之事、…万端対山城守、成君臣・父母之思、可馳走事、可為忠節候…

三男信孝に宛てた朱印状である。信孝に讃岐、三好康長（山城守）に阿波を与え、残り2カ国は信長の淡路出馬まで保留するという内容。

信孝は康長の養子になることが決まっていたため、近い将来信孝は讃岐・阿波の東四国2カ国を領有することが約束されていた。信孝は伊勢2郡、知行高5万石ぐらいの所領しか持っていなかったが、一挙に2カ国の国持大名になる。このときに土佐には長宗我部元親がおり、四国平定をめざしていた。光秀は元親の取次を長くつとめていた。信長が信孝に示した四国国分けは長宗我部氏の既得権益に抵触していたので、元親の不平・不満が高まるとともに、元親と信長の板挟みになった光秀の立場も微妙なものがあった。



【史料　斎藤利三をめぐる親族婚姻関係略系図】

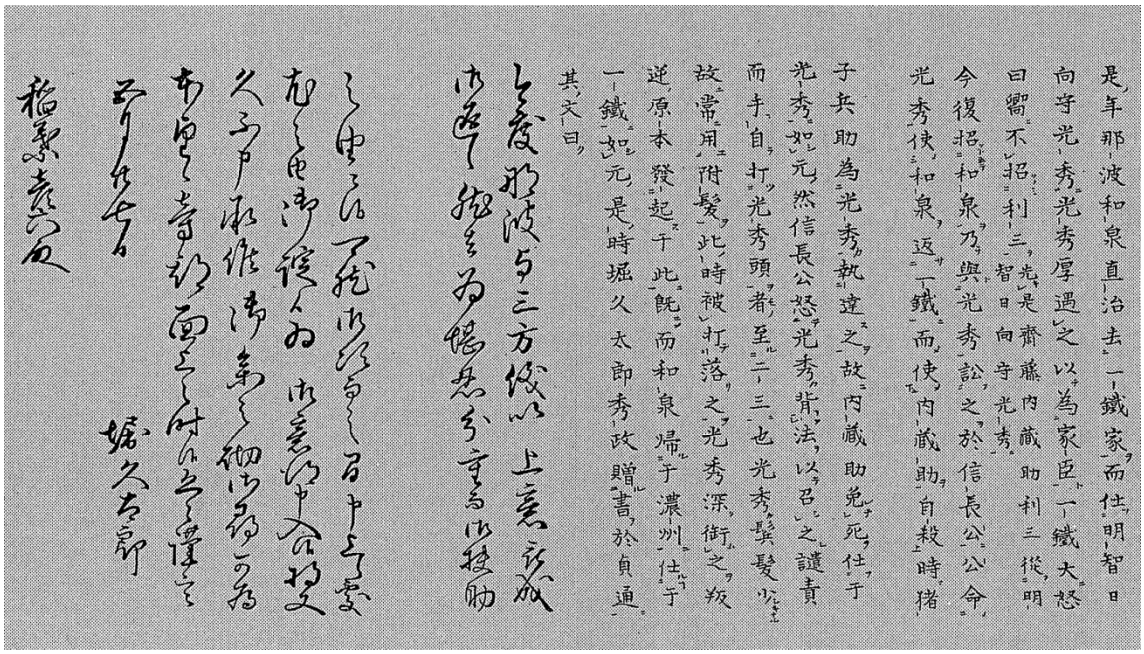
光秀の重臣である斎藤利三を中心にして、蜷川氏と石谷氏は、長宗我部氏と深い関係が築かれていたことがわかる。利三の兄が石谷氏の養子になった。利三の義理の妹が

元親の婦人である。蜷川親長は利三の妹婿である。親長は長宗我部元親の政治顧問を担当し、織田信長との外交を担当していた。

長宗我部氏の命運が危うくなり、長宗我部氏の取次であった光秀が、四国国分けと四国遠征から排除されたと言える。これが本能寺の変の1カ月前である。

7　天正10年5月中旬、『稲葉家譜』信長が安土城中で光秀を折檻

【史料　稲葉家譜　四
（謄写本・東京大学史料編纂所架蔵）】



右側は楷書、左側はくずし字で書かれている。右は稲葉家での出来事を具体的に書き、左は証拠の史料をそのまま写している。左は確実な史料で、右はその解説である。活字にしたものを紹介する。

「是の年、那波和泉直治、一鉄の家を去りて、明智日向守光秀に仕う、先秀厚くこれを遇し、以て家臣となす、一鉄大いに怒りて曰く、嚮に利三を招くのみならず[是より先き、斎藤内蔵助利三、明智日向守光秀に従う]今復、和泉を招く、乃ち光秀とこれを信長公に訴う、公、光秀に命じて和泉をして一鉄に返さしむ、而して内蔵助をして自殺せしめんとす、時に猪子烏脚、光秀のために執り達す、故に内蔵助死を免れて先秀に仕えて元の如し、然れども信長公、光秀が法を背くを怒り、以てこれを召し、譴責して。手自ら光秀の頭を打つもの二、三に至る他、光秀鬢髪少しきなる故に常に附髪を用ゆ、此の時これを打ち落とさる、光秀深くこれを銜む、叛逆の原本此に発起す、既にして和泉、濃州に帰る、一鉄に仕うること元の如し」

かつて稲葉家の旧臣だった斎藤利三が稲葉家から那波直治を引き抜いた。信長の裁定で利三は自害を命じられる。信長は光秀が「法を背く」（家臣団編成秩序を逸脱か）ものだと怒り、折檻したので、光秀は「附髪」が落ちるという屈辱を味わった。これは武士の面白にかかわる事態であったと考えられる。

８　天正10年5月27日、堀秀政、那波問題について信長の裁定伝える

【史料　美濃稲葉貞通宛堀秀政書状写
（増訂　織田信長文書の研究 補遺）】

①今度度那波与三方儀、以上意被成御返候、然者、為堪忍分重而御扶勝之由ニ候…

②仍其方御身上之儀、従彦六殿内々被仰合候、為筋目重而御支配之由承候…

①は稲葉貞通宛ての書状で、那波直治の知行について、信長が「堪忍分」を扶助している。

②は那波直治宛ての書状で、直治の処遇について、あくまで「筋目として重ねて御支配」と稲葉貞通の家来として再出仕するよう命じている。「筋目」すなわち家臣団秩序のルールが重要だと書かれている。

９　天正10年5月中旬、『フロイス日本史』「一度か二度、明智を足蹴」

【史料　フロイス日本史５】

「…人人が語るところによれば、彼の好みに合わぬ要件で、明智が言葉を返すと、信長は立ち上がり、怒りをこめ、一度か二度、明智を足蹴りにしたということである。だが、それは密かになされたことであり、二人だけの間での出来事だったので、後々まで民衆の噂に残ることはなかったが、あるいはこのことから明智はなんらかの根拠を作ろうと欲したかも知れぬし、あるいは、その過度の利欲と野心が募りに募り、ついにはそれが天下の主になることを彼に望ませるまでになったのかもしれない。」

ルイス・フロイスはイエズス会の宣教師である。日記がとても有名である。『稲葉家譜』での「附髪」事件と同じ時期に安土城中で起こったと思われる出来事が書かれている。フロイスの著書は信憑性が高い史料である。

10　天正10年5月28日、明智光秀、伯替の福屋隆兼に書状

【史料　福屋金吾旧記文書（阿波国子文書三　東京大学史料編纂所架蔵謄写本）】

福屋彦太郎宛て明智光秀書状写し

｛釈文｝

…抑山陰道出勢之義被仰出付、……山陽道毛利・吉川・小早川於出、羽藤対陣之由之間、此度之義ハ、先生彼面可相勤之旨上意ニ候、着陣之上、様子見合、令変化、伯州へ可向候……委曲山田喜兵衛自可有演口候

光秀が山陰の福屋彦太郎に宛てた書状（5月28日付）。本能寺の3日前の書である可能性が高い。光秀が愛宕百韻で「ときは今 天がしたたる　五月かな」の句を詠んだ日と同じである。

光秀は信長から山陰に出陣するように命じられている。福屋は尼子旧臣、山中鹿之助と盟友、伯耆で南条元続とともに毛利方と対峙中。山陽道には毛利、吉川、小早川が出陣してきており、光秀は備中の羽柴秀吉支援ののち、伯耆へ転陣し、福屋・南条らの支援を約束した。「ときは今」の解釈とも関わってくる。

取次の山田喜兵衛をどう見るかであるが、取次は現地派遣の使者ではない。

おわりに―光秀と信長の決定的亀裂―

・その時期は天正10年5月中旬、安土城中での折艦事件が重大契機か。
　→光秀の受けた屈辱は武士の面白を全否定するもの

・それに政治的な背景として、四国国分け問題と那波直治問題がからむか。

・光秀は直前まで謀叛を決断できず。
　→信長の少人数での上洛と嫡男信忠在京という好条件を好機と見たか。

Ⅴ　戦国丹波の城と武将たち

静岡大学名誉教授
文学博士　　小和田　哲男

はじめに

私は時代考証として、ＮＨＫ大河ドラマ「天地人」「江～姫たちの戦国～」を手がけてきている。以前は原作をもとにシナリオを作成していたが、「江」も来年の「軍師官兵衛」もそうだが、最近、原作はなく、脚本家がオリジナルの脚本を書いている。私の仕事は、そのシナリオの言い回しや事実関係と合致しているかなどのチェックをしている。

意外と多いのは、今の常識が必ずしも戦国時代の事実とは重ならないということである。例えば「天地人」の中の酒盛りのシーンで「越後は米所、酒所」というセリフがあった。確かに現在、越後（新潟県）は米所で、おいしいお酒もあるが、新潟の酒がおいしいと言われるようになったのは、ここ 30 年、30 年前からのことである。戦国時代は、まだ酒所ではなかったので、このセリフは事実にそぐわないという指摘をした。

大河ドラマは、どうしてもフィクションが入り、史実と遠ざかることが多い。時代考証をしていて、大きな役割は、できる限り史実と合致するようにすることである。ただ、演出とのせめぎ合いで落としどころをどうするかは、難しいこともある。「江～姫たちの戦国～」の織田信長が小谷城を攻める場面では、城を焼いたという記述もない、焼けたという痕跡もないので、城を焼かないことになっていた。しかし、撮影の数日前にディレクターから懇願され、城が焼けるシーンを撮ることになったということもあった。

明智光秀を大河ドラマにというマスコミの声もあるが、こればかりはわからない。

今、一番熱心なのは長野県の上田。「真田幸村を…」というので、66,666 人の署名を集めたらしい。あと、熊本の加藤清正も 25 万の署名を集めている。ただ、明智光秀もいつかはやるのではないかと思っている。期待していただきたい。

本日は、戦国丹波の城と武将たちの中で、特に明智光秀の丹波攻めを中心にしながら話していきたい。

１　明智光秀に丹波経略を命ずる織田信長

光秀は、文官・武官という分け方をすれば、どちらかといえば文官である。奉行人的な仕事にたけた人物であった。

信長は光秀をいろんな戦いに動員して、働きぶりを見ていた。信長が光秀の武将としての才能を認めたのは、1570 年の「金ヶ崎の退き口」。浅井が反旗を翻し、信長が命からがら京都に逃げ帰ったとき、光秀は秀吉とともに金ヶ崎城に残り、浅倉氏の追撃を防いだ。その後、秀吉が勝ち残ったため、全て秀吉の功績とされているが、信長は武将達の働きぶりを見て、光秀が戦いにはたけていると判断し、いろんな戦いに動員することになる。その中でも、有名なのが比叡山延暦寺の焼き討ち、越前一向一揆の討伐などがある。

比叡山延暦寺の焼き討ち直後、信長は麓の坂本に城を築かせ、城主（一国一城の主）に光秀を任命した。一国とは、お城に附属している土地、それが一つの国（近江の国の滋賀郡）。1 万石で大名と言われる中で、

4 万石を与えられた。織田軍団の中で、他の武将をさしおいて、光秀が第一号である。これが、働きに応じて恩賞を与える信長流人事のすごいところである。第二号は、小谷城を落とした後の長浜城である。それだけ、光秀は信長に認められていた。

【天正 3 年（1575）6 月 7 日付
川勝継氏宛朱印状】

（五一五）　丹波川勝継氏宛朱印状写（『古文書』二川勝）（○記録御用所本）

川勝豊前守光照（初下田氏を称す）、拝受、同新蔵広業書上、○中略
同断（川勝備後守継氏）、信長より之判物

内藤・宇津事、先年京都錯乱之刻、対此方逆心未相休候哉、無出仕候ハヽ、為可加誅罰、明智（光秀）十兵衛
被指越候、連々馳走之条、猶以此時可抽忠節事、専一候也、仍状如件、

天正三
六月七日　信長朱印
川勝大膳亮（継氏）殿

（奥野高広『織田信長文書の研究』下巻）

信長が光秀を丹波攻めの大将にすることを伝えた最初のもの。天正 3 年の 5 月に、家康に頼まれ信長が出兵し、武田勝頼を破ったという長篠・設楽ヶ原の戦いがあった。そのことによって、東の方の驚異が取り除かれ、信長は西に目を向けるようになった。その手始めとして、信長は光秀に丹波平定を命じた。

6 月ごろに播磨では、黒田官兵衛が織田につくか、毛利につくか協議したときに、長篠・設楽ヶ原の戦いを紹介し、織田につくことを勧め、官兵衛が信長のもとに伝えに行っている。

（1）山城国の隣国丹波国の政治状況

丹波が、山城国の隣にあるのにも関わらず、信長の勢力圏に入ってなかったのは、足利義昭に近かったからである。しかし、天正元年に信長が義昭を追放したため、丹波の武将達は織田の反対勢力となった。その中心が荻野直正（赤井悪右衛門）である。悪＝強いというイメージがあった。但馬にも勢力をのばすなど、武将としてはかなり優秀な人物であった。その後、内藤・宇津氏も信長から離叛した。そして、長篠・設楽ヶ原の戦い後、丹波経略に乗り出した。

（2）第 1 次黒井城の戦い
天正 3 年 11 月～4 年正月

荻野直正は、国人と戦国大名の間ぐらいで、小戦国大名と言っていい。直正は、甲斐の武田勝頼や中国地方の吉川元春と連絡を取り合っていた。単なる抵抗勢力ではなく、反信長統一戦線の一躍を担っていた。そのため、信長にとっては、丹波経略は喫緊の課題であった。そして、天正 3 年 11 月から荻野直正（赤井悪右衛門）の居城である黒井城攻めが始まった。この戦いには、八上城の波多野秀治も一度は光秀軍に加わったが、天正 4 年正月 15 日、荻野側に寝返

ったため、最後の最後まで落とすことができず、失敗に終わった。光秀は、坂本城に逃げ帰るかたちとなり、燦々たる結果となった。

信長は、負け戦は嫌いだったので、本来であれば変わりを送り込むのであるが、この時は光秀を責めることはしていない。誰が攻めても、失敗したであろうと信長が判断したのではないかと思われる。その後も、光秀が丹波経略を担うことになる。

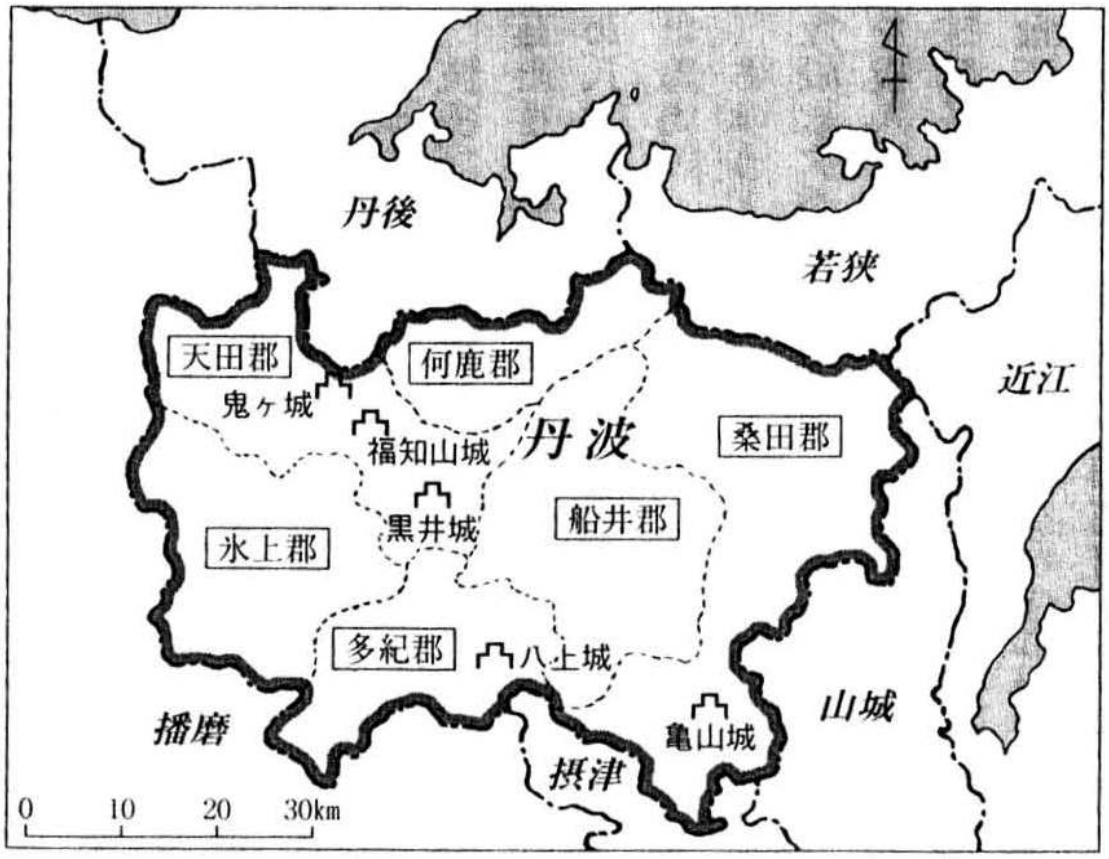
２　丹波攻略の本拠となる亀山城

天正 3～5 年ごろは、信長にとっては厳しい時期であった。この頃、石山本願寺が最大の敵として立ちはだかっていた。石山本願寺との戦い、紀州の雑賀一揆など、戦いの度に光秀がかり出されるため、丹波攻めに力を投入することができなかった。

また、天正 5 年 8 月には松永久秀が信長に離叛したが、10 月には細川忠興の活躍により、久秀は爆死した。そして、光秀が丹波経略に力を投入できる状況がようやくできた。

天正 5 年 (1577) 10 月、光秀は細川藤孝、忠興親子と一緒に丹波に出陣し、亀山城を攻めた。亀山城は、戦いの直前まで城主であった内藤定政が病死したため、実際は家老の安村治郎右衛門が指揮をとった。光秀は、無血開城にするため、初めは交渉するがのってこないので、最終的には力攻めということになった。

亀山城の戦いのとき、大手口を光秀、搦め手口を忠興が担当した。両方から攻められたので、安村氏は降参をした。それを、光秀は認めたが、それに対して認めない忠興を光秀がなだめ、落城寸前での降伏をみ



丹波国の諸郡と主要な城

とめ、内藤氏とその家臣団を許した。そして、並河掃部、四王天但馬守、荻野彦兵衛などが、家臣として光秀についてきた。これが、光秀家臣団が大きく成長していく原点であり、信長との決定的な違いである。信長は、自分に敵対した者は家臣とはしなかった。それが、信長の家臣団が上手くいかなかった大きな原因である。徳川家康は、今川氏、武田氏など積極敵に家臣を取り込んだため、最後の勝者になったとも考えられる。

亀山城落城の後、光秀は亀山城を丹波攻めの拠点とした。天正 6 年には、惣堀（城下町まで取り込んだ広い堀）の普請を行い、小規模な亀山城を近世城郭風に造り直した。その後、篠山城などを攻め、亀山周辺から少しずつ勢力をのばしていった。

３　天正 6 年～7 年の八上城の戦い

天正 6 年 3 月から八上城攻めが始まる。一気に丹波平定を成し遂げるため、信長自らが出陣する予定だったが諸般の事情でとりやめとなり、家臣団の中でも有名な滝川一益、細川藤孝らが光秀を助けて出陣となった。

光秀は、3 月 3 日坂本城を出陣し、丹波に入って八上城を囲んだが、簡単には落とすことができなかった。そのころ、摂津で石山本願寺との戦いも熾烈になっており、いつまでも大軍を置いておくわけにはいかなかった。結局、光秀は家臣の明智次右衛門を残し、主力は本願寺の方に行くことになった。

【園部城の荒木氏綱開城】

本願寺での戦いは 4 月 5, 6 日の二日間にわたって展開し、ようやく有利な状況となり、丹波攻めに集中することになった。直接、八上城ではなく周りのお城を攻めた。天正 6 年 4 月 26 日、船井郡の園部城（城主・荒木氏綱）を開城。その勢いで八上城を攻めると考えていたが、荒木村重の謀反により、八上城攻めは中断することになった。光秀は、荒木家に自分の娘が嫁いでいたため、荒木村重の謀反をやめるように説得していた。八上城を包囲したまま年を越すことになった。

光秀は、天正 7 年（1579）正月には一度坂本城に戻っており、2 月 28 日に亀山城に入り、3 月 16 日には八上城の近くまで兵を進めた。

光秀は、力攻めする一方で、城主の波多野秀治と勧降工作をし、6 月 2 日、波多野秀治・秀尚兄弟は降伏した。しかし、信長は、降伏を許さず、波多野兄弟を殺してしまう。八上城の開城により、光秀による丹波平定は最後の山場をむかえる。

４　丹波平定に最大の山場　第２次黒井城の戦い

八上城開城前の天正 7 年 5 月初めから 15 日にかけて、波多野宗長・宗貞が守る氷上山城を攻め落とした。

八上城開城後の天正 7 年 19 日には、宇津城陥落。

その後、黒井城を攻めに向かう。天正 3 年に落とすことができなかったため、天正 7 年の戦いを第 2 次と言っている。

天正 7 年に黒井城の城主は荻野直正ではなく、息子の荻野直義であった。

光秀は、いきなり黒井城を攻めるのではなく、荻野氏の第二の拠点ともいうべき鬼ヶ城を攻めた。そこを守っていたのは、直正の兄の荻野忠家であった。

8 月 9 日、黒井城陥落。陥落後、重臣の斎藤利三を置いて、黒井城を守らせた。斎藤利三の娘のおふく、後の春日局がこの黒井城の麓で生まれたという話にもつながる。

黒井城落城をもって、ようやく丹波平定は完成。

【8 月 24 日　丹波氷上郡寺庵中等宛惟任光秀副状】

（八四〇）　丹波氷上郡寺庵中等宛惟任光秀副状（『富永文書』○丹波）

今度赤井五郎（忠家）御成敗之儀、被仰出、任上意之旨申付候、仍在々所々不寄誰々、急度可還住者也、

天正七年
八月廿四日　　光秀（惟任）（花押）

氷上郡
寺庵中
高見山下町人中
所々名主中
所々百姓中

（奥野高広『織田信長文書の研究』下巻）

副状なので、信長の本状があり、それに光秀副状をそえたもの。

戦いがあると、大体は田畑や家々は荒らされるため、住んでいた人々は戦乱をさけて、山の中など、戦いのない地域に避難する。戦いは終わっても、もとの場所にはもどってこない。それでは、耕作はできないし、年貢の期待もできないことになるので、もとの土地にもどって農作業をするよう指示した。（還住政策）

光秀が、丹波を戦国的な世界から近世的な世界に造り変えていったと言ってもいい。

天正 7 年に丹波が織田領国に組み込まれていく。

おわりに

秀吉が、播磨から備前・美作の領主、宇喜多直家を調略することで、織田の力が備前、美作まで及ぶ。備前と備中の境が毛利との境界線になる。境目七城（宮路山城、冠山城、高松城、鴨城、日幡山城、庭妹城、松島城）を毛利方が造る。その真ん中にあたるのが高松城であり、清水宗治が入ってくる。秀吉は、高松城を攻めるにあたって、水攻めをする。信長は、光秀に秀吉を応援にいくよう命令する。応援にいくということは、秀吉の下につくこと。光秀にとってはすごくショックだったと思われる。織田家臣の中で、一国一城の主の第一号は光秀、第二号は秀吉。石高は、戦いごとに拮抗していた。

「本能寺の変」についての考え

怨恨説：信長から日頃いじめにあっておりその怒りが爆発したという説

野望説：武将として生まれた以上、天下をとりたかったという説

黒幕説：公家たちが謀反をおこさせたという説

今まで天皇が握っていた権限に信長が少しずつ乗り込んできたので、これ以上そのままにしておくと朝廷が危ないと光秀が判断して謀反をおこしたという説もある。

光秀は、源氏というものを相当意識していた。平氏である信長を討つのは、足利尊氏の再来であると考えた。光秀の謀反には、まだまだ謎があり、本心はまだわからない

Ⅵ　戦国時代の長寿メシ

綜合長寿食研究所所長
食文化史研究家　永山　久夫

はじめに

日本人は長生きである。平均寿命は、女性は第1位、男性は第5位である。しかし、健康寿命は短すぎる。健康寿命とは、その歳まで独り立ちして、身の回りの事ができるということ。女性の平均寿命は86歳、健康寿命は 73 歳である。男性の平均寿命は79歳、健康寿命は70歳である。女性は13年間、男性は9年間、誰かの世話になるということである。また、健康寿命は短くなりつつある。

今日の大きなテーマは、「戦国武将に学ぶ、健康寿命を延ばす方法」。戦国武将は、いつ敵が攻めてくるかわからない、家臣との信頼関係を築くのが重要である状況の中で、健康管理に一生懸命であった。上手く管理できた武将が、最終的に天下をとるような存在になった。戦国武将の信長、秀吉、家康はそれぞれキャラクターが違っていたが、最後に成功したのは一番堅実的な生活をしていた家康だった。家康は、75歳まで生きている。当時の平均寿命は40歳ぐらいであったので、かなりの長寿であった。どうして家康がこんなに長生きできたのかを考えていきたい。

1　徳川家康の八大天下取り食

【玄米】

戦国時代であるので、ストレスは想像を絶するものであったと思われる。ストレスに負けないことが重要であった。現在のサプリメントにもあるギャバには、イライラを防いだり、脳を安静にしたりする効果がある。昔の母親は、その日の最後の仕事としてご飯をしかけてから寝ていた。つまり、一晩お米を水につけることになる。すると、米に含まれているグルタミン酸（お米の旨み成分）がギャバになる。ギャバは白米よりも玄米、胚芽米に多い。昔は、継続的にギャバを摂取し、イライラを防いでいた。

【麦飯と赤イワシ】

家康は、毎日欠かさず麦飯と赤イワシを食べていた。赤イワシとは、塩漬けにしたイワシで、酸化して赤くなる。独特の渋みが出て美味しくなる。麦飯には、ビタミンB1がたくさん含まれている。ビタミンB1が不足すると、記憶力が低下し、痴呆症やアルツハイマーになりやすいことがわかっている。食生活は、老化すなわち寿命そのものに関係している。

【みそ汁】

みそ汁の作り方のコツは、「実の三種は、身の薬」。実は具のことであり、三種類入れると体の薬になるということ。実には、走り（初物）・旬・名残りがあり、日本人は旬を大切にした。名残りが終わると、その食材は来年まで食べない。そういう潔さが日本の食文化の中にはある。また、大豆には植物性のイソフラボンという抗酸化成分が含まれている。

【お茶】

若さを維持するには、抗酸化成分をとることが重要である。呼吸をすることで、酸素を体内に取り込むので、人間の体は酸化し、老化していく。それを防ぐのが抗酸化成分のカテキンであり、お茶に多く含まれている。日本の47都道府県の中で一番平均

寿命が長いのが長野県である。日本で健康寿命が一番長いのは、お茶の生産で有名な静岡県（女性)、愛知県（男性）である。静岡県は、お茶の消費量も日本一である。カテキンは、熱いお茶の方がたくさん出る。信長も秀吉も家康も、お茶をすごく大切にした。

アメリカの農務省が発表した、ガンやアルツハイマーを防ぐ食品 20 種類のトップは小豆で、他に黒ブドウや茄子などの野菜、穀物、豆類が含まれている。共通する成分として抗酸化成分のアルトシアニンが含まれている。カテキンとアルトシアニンの組合せは非常に良く、抗酸化力が強い。

【梅干し】

梅干しは焼くことよって、ムメフラールという成分が発生する。中高年になると血栓が発生しやすくなり、脳梗塞や心臓病になったりするが、ムメフラールには、その血栓を溶かす力がある。

【焼きみそ】

焼き味噌は、味噌、かつお節、ごま、生姜をよく練って作り、ご飯を食べる時のおかずにする。食欲が増すだけでなく、レシチンという成分が含まれている。年をとると脳の中の神経伝達物質が欠落すると言われているが、その原料がレシチンである。大豆 100ｇ中に 1480mg 含まれている。すなわち、大豆は痴呆症などを予防するために重要である。

武士は、一日にお米を 5 合食べていたと言われる。カロリーに換算すると 2600 カロリーである。足軽や密使などの脚力は、5 日間で 200km 走るぐらいの相当なものであった。そのときに、走りながら食べたのが、「走り飯」と言われる焼き味噌をぬったおにぎりである。

２　豊臣秀吉の天下取り食

秀吉は、人を虜にしてしまう、幸せにしてしまうような魅力があった。秀吉は、人を魅了する楽しさ、大らかさを持っていたと思う。どうして秀吉は魅力のある人物だったのか、食生活からその一端が垣間見え、セロトニン（幸せホルモン）が大きく関係している。

秀吉は、子どものころ貧乏だったために、田に入ってドジョウを捕って食べていた。ドジョウには、セロトニンの原料となるトリプトファンという必須アミノ酸が含まれている。セロトニンが増えると、プラス思考になる。秀吉は、知らず知らずのうちにセロトニンを増やす食生活を継続し、人間としての魅力を増幅したと考えられる。また、セロトニンが多い人は、いつもニコニコしているので免疫力も高まり、病気になりにくい。そして、セロトニンは夜になるとメラトニン（睡眠薬）に変わるためよく眠れる。

家康と秀吉、どちらかといえば秀吉の食生活を実践する方がいい。ドジョウでなくても、じゃこやかつお節などの小魚類を食べることで同じような効果が得られる。干しダコ、スルメ、貝類には、暗がりでも物がよく見えるタウリンが含まれている。タウリンは、戦国時代の足軽や忍者にかかせない成分だった。昔の人は、何を食べれば人間の機能が高まるのか知っていたのではないか。

戦国時代は、今のように清潔ではなかったため、日常生活の中で菌をとり、免疫力が自然と高まった。清潔にしすぎると常在菌を殺してしまうので、善し悪しである。

おわりに

昨年、和食文化がユネスコの世界無形文化財になった。そのため、世界中で和食が注目されている。和食が注目されているのは、美味しいとか美しいとかというだけでなく、長生きするためにとても良いからである。健康寿命を延ばすため、幸せに生きるために、日々の食を大切にしていただきたい。

＜質疑より＞

Q：信長は、本能寺で討たれていなければ長生きしていたか？

A：短命だったと思う。理由は２つ。１つ目は、短気だったため、人に恨まれるだけでなく、血管にダメージを与える可能性が高かったと思う。２つ目は、塩辛い物が好きだったため、血圧が高かったと思う。

Q：黒ゴマについてどう思うか？

A：セサミンという抗酸化成分やカルシウムが多く含まれている。そのため、イライラを防いだり、骨を丈夫にしたりする効果がある。現在のサプリメントを摂取するよりも、黒ゴマを食べる方がいい。酸化を防ぐために、ゴマ味噌を作って保存する方法もいい。

Q：戦国時代の武士は肉を食べていたのか？

A：牛、猪、鹿、鶴（鳥）、豚などを食べていた。スペインの船が高知の沖で難破したとき、秀吉が 200 頭の豚を差し出したという話がある。豚を飼っていたということであり、日本人も相当肉を食べていたと考えられる。

３　講師紹介

久下 隆史 氏

篠山市在住。元高等学校教諭、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課指導主事のち施設係長。但馬文教府長・宝塚北高校校長・阪神北教育事務所長、県立北摂三田高等学校校長歴任。専門は、日本民俗学・日本芸能史で園田学園女子大学非常勤講師として活躍。丹波のみならず兵庫県全体の民俗芸能に関し造詣が深い。平成 22 年度講座「丹波学」の講師。テーマ「古道と信仰の道を行く」著書　『村落祭祀と芸能』（名著出版）

福島 克彦 氏

立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史、城と城下町の研究において大きな功績がある。現在大山崎町歴史資料館学芸員。著書に『畿内・近国の戦国合戦』。主な論文に『織豊期における城郭・城下町の地域的展開』『城郭研究から見た山科寺内町』『明智光秀文書目録』等がある。

桐野 作人 氏

歴史小説・時代小説（架空戦記を含む）の作家、歴史研究家。鹿児島県出水市出身。出水高校、立命館大学文学部東洋史学専攻卒業。歴史関係出版社の編集長を経て、編集プロダクションを設立。戦国史の研究が多く、著書に『目からウロコの三国志–複雑な時代背景と人物像がよくわかる!』『さつま人国誌 幕末・明治編』『関ケ原島津退き口 敵中突破三〇〇里』『信長帝王伝』『真説 関ヶ原合戦』『真説 本能寺』『だれが信長を殺したのか』『火縄銃・大筒・騎馬・鉄甲船の威力 戦国最強の兵器図鑑』『織田信長 戦国最強の軍事カリスマ』『江の生涯を歩く』など多数執筆。

小和田 哲男 氏

静岡県生まれ。早稲田大学卒業。2009 年まで静岡大学教育学部教授を務め、現在静岡大学名誉教授。ＮＨＫテレビ「歴史秘話ヒストリア」「さかのぼり日本史」などに現在も出演。分かりやすい解説には定評がある。ＮＨＫ大河ドラマ「秀吉」（1996 年）、「功名が辻」（2006 年）、「天地人」（2009 年）、「江～姫たちの戦国～」（2011 年）などの時代考証も務める。ベストセラーとなった『日本の歴史がわかる本』や『春日局　知られざる実像』（講談社）『国際情報人信長』（集英社）『近江浅井氏』（新人物往来社）『桶狭間の戦い信長会心の奇襲作戦』（学習研究社）『明智光秀～つくられた謀反人～』（ＰＨＰ新書）『徳川秀忠凡庸な二代目の功績』（ＰＨＰ新書）『北政所と淀殿－豊臣家を守ろうとした妻たち』（吉川弘文館）等著書多数。

永山 久夫 氏

福島県生まれ。古代から明治時代まで日本の各時代の食事復元研究に長年携わる、食文化史研究の第一人者。長年行ってきた長寿村の食生活の調査結果を基に、古代食や長寿食・情報化時代の頭脳食などをテーマに講演。ＮＨＫ大河ドラマ「独眼竜政宗」「武田信玄」「春日局」では、それぞれの主人公の食膳を再現、時代考証も手がけた。その他、テレビＣＭでは信長、家康、謙信、西郷隆盛などの時代考証を担当。著書に『戦国の食術 勝つための食の極意』『江戸めしのス ゝメ』『長寿食 365 日』『日本人は何を食べてきたのか』『世界一の長寿食「和食」』『和食の起源』『日本古代食事典』他 100 冊以上。毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞、東京新聞、夕刊フジに連載。

４　編集後記

講座「丹波学」は、平成８年度、兵庫丹波の伝統、文化、人物、言語などを総合的に考えていく「地域づくり」を目指した地域学としてスタートしました。「丹波学」を学ぶ意義は「温故知新」まさに、故きを温ねて新しきを知る。ただ単に昔のことを知るだけでなく、その知識を今後の我々の生活に活かすことにあります。１８年目を迎えた今年度も１８０名近くの方々に受講いただき、その熱意に頭が下がる思いです。受講者の中には、小、中、高校生も数名含まれ、地域の歴史に関心を持つ人々の幅が広がっていることを嬉しく思っています。

今回の講座では「戦国・武将・丹波」をテーマに、戦国武将の歴史研究家として著名な講師を招き、最新の研究や情報などを織り交ぜながら、戦国武将の生き方やその時代の文化や食について学ぶ講義を展開してまいりました。講師の先生方には、単なる専門的な知識の伝授ではなく、わかりやすい講義をしていただきました。

受講者の方からは「今まで知らなかった丹波の歴史をわかりやすく講義いただき、新たな発見がたくさんありました。」「講師陣の顔ぶれが素晴らしく、史料、史実に基づいた満足のいく内容でした。」という感想をいただきました。と、同時に「丹波の歴史をもっと深く学びたい。」「さらに内容の充実した講座を企画してほしい。」というご意見もいただきました。ご意見をお聞きし、地域の方々の要望にお応えできるよう本講座の原点に立ち返り、楽しく、深く、分かりやすい講座を企画していきたいと思います。

「丹波学」を通して、丹波地域の歴史的遺産や人物に目を向け、その価値を再認識し、先人達の生き様を知ることで、皆様が丹波地域により愛着と誇りを持たれ、共通の学びから新たなつながりやネットワークを構築いただければ幸いです。そして、丹波地域の活性化につながる新たな展開の一助となれば大変嬉しく思います。

平成２５年度講座「丹波学」講義録

平成２６年３月発行

発行　（公財）兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑　文化振興部

〒６６９－３３０９
丹波市柏原町柏原５６００
TEL　０７９５－７２－５１７０